

## アメリカで見た日本人の足跡

押味和夫

元・順天堂大学医学部血液内科教授

### ● はじめに

アメリカに住んでいたのは、1972 年からの2年間と、2008 年からの 3 年半の計5年半です。帰国後すでに14年近く経ってますので、当時アメリカで見た日本人の足跡は若い人には時代遅れに映るかもしれませんが、お楽しみいただければ幸いです。

育ったのは昔なら伊達藩に属する福島県伊達郡梁川町ですが、若いころ石光真人編著の「ある明治人の記録、会津人柴五郎の遺書」を読んで、心はすっかり会津藩士になってしまいました。従いまして、どうしても目は会津に向いてしまいます。

米国やカナダに19世紀後半から移住した日本人は、おもに漁業、農業、林業、鉱業に就いていました。彼らの足跡は、重労働、逆境、心労、望郷、不屈、希望、勝利などで表わされます。改めてその歴史を見ますと、1866年に海外渡航禁止令(鎖国令)が解除され、1868年つまり明治元年にはハワイへの移住が始まっています。米国本土へはその翌年に行ってます。驚いたことに、最初の米国本土への移住は戊辰戦争に敗れた会津藩士とその家族でした。会津藩士らが向かったのは、下北半島だけではなかったのです。

### ● 戊辰戦争に敗れた会津藩士とその家族らが、カリフォルニア州ゴールドヒルに移住。

1869年、正確な人数ははっきりしませんが 22~30人が会津の殿様・松平容保(かたもり)公お抱えの武器商人、プロイセン人のヘンリー・シュネルに連れられて、アメリカ本土へ渡りました。茶と絹の生産を始める計画で、日本から大量の茶の木の種と桑の木を持ち込みました。現地の記者の目に写った藩士らの印象は、大変教養があり洗練された紳士たちで、その家族も高貴とのことでした。

サンフランシスコの北東140km にサクラメント市がありますが、入植地はサクラメントから約50km北東にある ゴールドヒル Gold Hill です。この項目の最後にある地図をご覧ください。入植の前まではゴールドラッシュで賑わっていたので、ゴールドヒルの名がつけられました。シュネルがこの土地を購入し、Wakamatsu Tea and Silk Farm Colony いわゆる若松コロニーを造り、お茶や養蚕業を興そうとして開墾を始めました。入植1年目はお茶や桑の木の生育もよく開拓は成功するかに見えたのですが、2年目には旱魃に見舞われ、近くの金鉱の採掘現場から流れ出た毒物(?)により木々は汚染され、食糧危機も起こり、病の流行もあったようで、その上シュネルは日本で資金を調達してくるという戻ってきませんでした。見捨てられた入植者がその後どういう運命をたどったかははっきりしませんが、移民団は離散し、望郷の思いに駆られながら異国の地で死んでいったようです。日本に帰国できた人も

いたようですが。

ゴールドヒルは2011年1月、サンフランシスコの学会に行ったときに訪ねました。雨が少なく乾燥しているため荒れた土地のまま放置されているか(写真)、牧場かブドウ畑になっていました。会津藩士らが入植する前の1848年1月に、すぐ北にある Coloma の American River で金の薄片が発見され、このニュースがまたたく間に広がり、翌年には世界中から金を求める人が殺到しました。この人たちが 49ers (forty-niners) です。ジョン万次郎も1850年、帰国用の資金を稼ぐため、この辺りで働いていたようです。

入植地には会津藩士と家族が住んだ家が残されていました(写真)。当時は修復中で、今は会津藩の展示会場になっているそうです。入植100年を記念して造られた日本庭園(写真)で、当時のレーガン・カリフォルニア州知事呼んで記念式典を催しましたところ、黒人女性と結婚した侍の子孫が名乗り出たそうです。記念庭園と共に造られた記念碑には、こう書いてあります。WAKAMATSU TEA AND SILK FARM COLONY の名で、「カリフォルニアにある唯一の茶と絹の農場。1869年6月8日にゴールドヒルに着いたパイオニアの日本人移民の最初の農業用集落。最初は成功したが、栄えることはなかった。カリフォルニアの農業経済への日本の影響の始まりとして記す」。

「おけい」という少女がいました。シュネルと日本人妻の間に生まれた子供たちの面倒を見るため日本から同行しましたが、彼とその家族が去ったあとは近くの農場のドイツ人家族、ビアキャンプ Veerkamp 家(写真)に子守りとして雇われました。本当の娘のように可愛がられて、ジャパニーズ プリンセスと呼ばれてました。ビアキャンプ家から大切にされていたおけいさんでしたが、1871年夏に突如熱病にかかり、3日後には帰らぬ人になってしまいました。わずか19歳でした。彼女の墓は、この日本庭園の隣りにある小高い丘の上にあります(写真)。丘の上では、会津から持ってきた榎の木の種が大きく育っています。彼女の望み通り、丘の上の、榎の種が芽を出した近くに葬られました。お墓はレプリカに代えられていましたが、このお墓の写真をご覧ください。数十年後にこのお墓を見つけた日本人が、てっきり近くの鉱山労働者を相手にしていた娼婦と思い、隣りに住むビアキャンプさんに尋ねましたら、その家族のもとに引き取られていた少女と判明しました。この写真では長男の Henry Veerkamp 氏はまだ若かったのですが、80歳になったときに羅府新報の記者におけいさんのことを聞かれました。このときの記事をご覧ください(写真)。

おけいさんのお墓がある丘へ登るには100周年記念の日本庭園の横の鍵がかかった門を通らねばなりませんでした。隣の小学校の事務員の方が案内してくれたお蔭で、小学校の破れたフェンスの合間を抜けて行くことが出来ました。

アメリカ本土に初めて日本人移民(会津藩士ら)が入植してから150年経った 2019 年に、WakamatsuFest 150 が開かれました。日本からは徳川宗家 19 代当主の徳川家広氏、会津からは松平容保公の子孫で 15 代当主の松平親保(ちかもり)氏が招かれました。おけいさんのお墓に詣でて、入植150年を祝ったそうです。

この若松コロニー跡は日本領事館も加わって保存へと動きました。広大な土地を買収する

のは大変だったようですが、ようやく2010年に自然保護団体 American River Conservancy が買収することに成功しました。見学者のための施設も整備されているようです。



明治2年(1869年)、戊辰戦争に敗れた会津藩士とその家族ら22〜30人が、Gold Hill に移住。

**Gold Hill 2011年撮影**  
広い乾いた土地という印象



**会津藩士と家族が住んだ家。**  
今は修復されて、会津藩の展示室になっているとのこと。

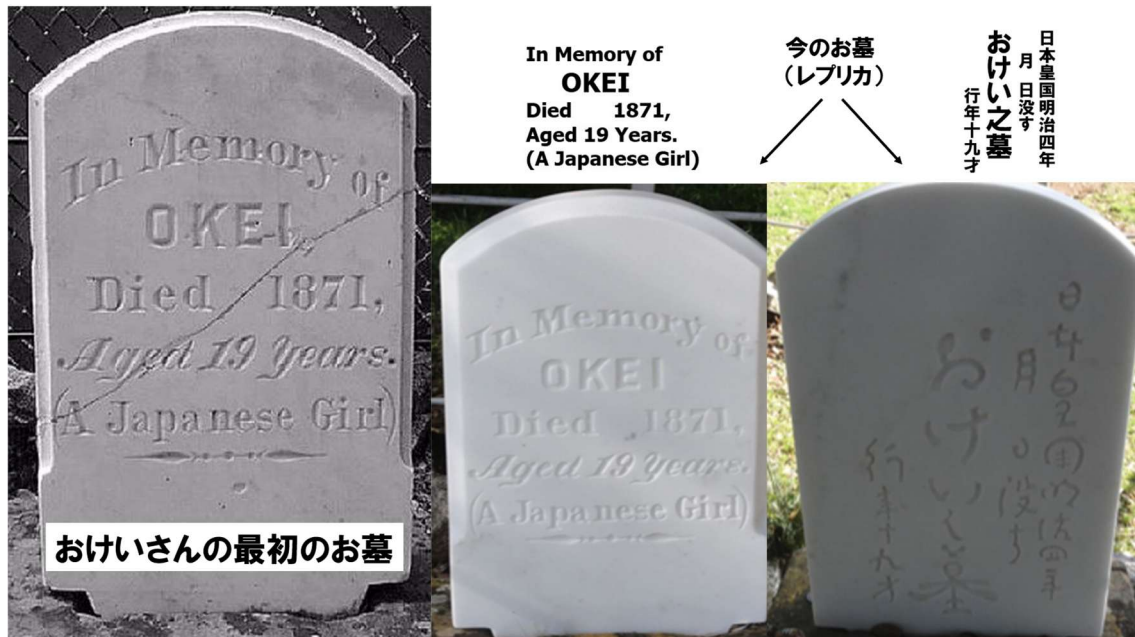
**入植100年を記念して造られた  
日本庭園と記念碑**











- ノーウィッチの高校の卒業生名簿に山川健次郎の名前がなかった。

山川健次郎は東京・九州・京都の各帝国大学の総長を歴任した会津藩士です。会津藩の藩校・日新館でもずば抜けた秀才だったようで、その優れた才能は若いときから注目されていました。

日新館は、司馬遼太郎によりますと、佐賀・鍋島藩の弘道館に負けないほどレベルの高い教育をしていたとのこと。江戸時代の最高学府だった江戸の昌平坂学問所の首席にあたる学寮の「舎長」を、会津藩は4人も輩出してます。そのような藩は他にはないとのこと。

山川は会津(戊辰)戦争では籠城戦をくぐり抜け、若松城開城後は猪苗代に謹慎の後、越後へ脱走、長州藩士・奥平謙輔の書生となりました。明治 4 年(1871 年)、会津藩が斗南藩として再興後、官費留学生に選抜されアメリカへ留学。英語を学ぶため、日本人がいないコネチカット州の小さな町ノーウィッチ Norwich に住み、Norwich Free Academy に入学。明治 5 年夏イエール大学付属の Sheffield Scientific School に合格。土木工学を専攻。3年間の "select course" で Ph.B. の資格を得て、明治8年5月卒業しました。イエール大学に残る履歴書には、山川について次のように書いてあります。

Yamakawa Kenjirō,  
Japanese samurai of Aizu Domain,  
Member of Byakkotai,  
Physicist,  
Member of the House of Peers.

山川はイエール大学を卒業後に帰国し、東京開成学校教授補などを経て、明治 12 年に26歳

の若さで東京大学理学部の物理学主任教授に就任しました。清廉潔白な人柄は多くの人の信頼を集め、社会を導く人という意味で「星座の人」と呼ばれました。弟子に長岡半太郎がいます。東大の安田講堂裏に山川の像があります(写真)。会津若松市の郊外に再現された日新館の門前にも山川の像があります。

山川がアメリカで留学した高校を探しました。この高校は、コネチカット州のノーウィッチにあることになっています。ボストンから南西へ車で 2 時間もかからないところです。イエール大学があるニューヘブーンよりもずっと東にあって、静かで落ち着いた小さな町です。町の中心に大きな高校がありました。Norwich Free Academy です。この高校へ行って卒業生名簿を調べましたが、1872 年前後に彼の名前はありませんでした。町の役所へ行き、当時、他に高校がなかったか調べてもらいましたが、ここしかありません。そこで思い出したのが、当時の校長先生の名前、ハチソン先生です。この高校へ戻り、もう一度名簿を調べましたら、ありました!! 当時の Norwich Free Academy の校長先生はハチソン先生です。ハチソン先生は、日本から来た非常に優秀な若者を、親身になって指導しました。山川がここに在籍していたことは間違いありません。ではなぜ彼の名前が卒業生名簿になかったのでしょうか。彼は1年しか在籍していなかったもので、正式には卒業してなかったのではないのでしょうか。



山川健次郎が通った高校があるNorwichと  
Yale大学があるNew Haven

山川健次郎が通った高校、Norwich Free Academy





若い頃の山川健次郎

東大安田講堂裏の山川健次郎像



● 中学校の答辞を英語で読んだ朝河貫一。

朝河貫一(1873—1948)は旧・安積中学きつての秀才で、中学の答辞を英語で読んだそうです。英人教師ハリファックスは、その文章の見事さに、「やがて世界はこの人を知るであらう」と語ったとのこと。

朝河は家が貧しく、早稲田の前身の専門学校を卒業後、本郷教会の牧師・横井時雄の紹介で、彼の友人ウィリアム・J・タッカーが学長をしているダートマス大学に学費免除で入学しました。ダートマス大学はアイビー・リーグの1つで、私も昔レジデントの職を求めて面接に行きましたが断られました。話はそれますが、このときに面接官から聞いたのが小川真紀雄先生のことです。先生はダートマス大学医学部付属病院で内科と血液科の研修をなさっておられたときに IgE 骨髄腫の患者さんを見つけて、IgE の発見者の石坂公成先生と共著で 1969 年に、「Clinical aspects of IgE myeloma」のタイトルで N Engl J Med に発表しておられます。面接のときに私が血液学に興味を持てると申しあげましたので、面接官の先生がこの話をしてくださいました。小川先生のことによほど印象に残っておられたのでしょうか。小川先生はサウスカロライナ州立医科大学名誉教授ですが、今はダートマス大学の近くにお住まいとのこと。ついでですが、小川先生と石坂先生の共同研究は、アトピー性皮膚炎も入れて全部で5つの論文があります。石坂先生の奥様の照子先生の名前が入った論文もあります。

話は戻ります。朝河貫一はダートマス大学を主席で卒業し、イエール大学大学院で歴史学を学びました。その後、彼はずっとイエールを離れず、最後までイエールの教授でいました。アメリカの大きな大学で教授になった初めての日本人です。彼の勉強振りはすさまじかったらしく、6～7 カ国語を駆使して日本の封建時代が世界の歴史の流れに占める位置を解明しようとし



ました。日露戦争のときにはアメリカ中を講演して回り、何故日本が戦争に突入せざるを得なかったかを説き、米国の世論を日本に有利になるように導きました。ポーツマスの日露和平交渉では日本側のオブザーバーを務めました。

ポーツマスの John Paul Jones House の2階にある日露講和交渉資料室で、たまたま朝河が書いた著書「The Russo-Japanese Conflict」を見つけました(写真)。当時の肩書きはダートマス大学東アジア文明歴史学科講師とあります。1905年にロンドンで出版された4～5cmもある分厚い本です。開戦に至るまでの国際関係の推移と経済の発展を客観的・学問的に研究し、両国の衝突の原因を明らかにした著書とのことです。朝河は本書を世に出した目的を、開戦時に欧米人は日本のことがよく理解できてないため日本に対する感情がゆれ動いて不安定だったので、少しでも正しい見解が生まれることを願ったからとのことでした。当時、朝河はまだ30歳にすぎませんでした。ただ、朝河でさえもこの戦いを日露ではなく露日 Russo-Japanese と書いているのは何故でしょうか、何かそれなりの理由があったのでしょうか。執筆したのはまだ戦争が決着する前だったので、露日と書いたのでしょうか。しかし、日本が勝った後も米国ではずっと露日戦争と言われていますので、もっと違う理由がありそうです。白色人種対黄色人種、西洋対東洋、キリスト教対仏教・・・このどれをとっても、露日と書く理由になりそうです。この悔しい思いは、ずっと私の頭を離れませんでした。ニッポン人として恥ずかしくない行動をとろう、ニッポン人のプライドを忘れるな、これがその後の私の行動の原点になりました。アメリカなんかには負けるものかと、ときどき思い出しては張り切りました。「露日衝突」は発売されるやただちに驚異的な売れ行きを見せ、版を重ねたそうです。陳列棚にある本を手にとって見たくとも触れることが出来ず、ガラス越しにじっと見つめていました。

朝河が太平洋戦争を避けるべくフランクリン・ルーズベルト大統領に送った書簡は有名です。この書簡で朝河は、ルーズベルト大統領が昭和天皇に直接親書を送ることを提案することで戦争を回避しようと努め、さらに天皇に宛てる親書の内容までも提案しました。読んでみると、日米関係の歴史から説いた格調高い英文で、流し読みは到底不可能です。実際にルーズベルトが書いた親書はかなり違ったようですが、彼が提案した親書が修正に修正を重ねて天皇に届いたのは、日本軍がパールハーバーに向けて飛び立った後でした。

2009年1月、私が研究している抗がん剤のことで、Yale Cancer Center の医師に相談に行くことが必要になりました。そこで、ちょうどいい機会と、イエール大学で山川健次郎と朝河貫一の足跡を調べることにしました。

イエール大学の先生が葬られている墓地が大学の近くにあります。Grove Street Cemetery です。朝河はここに眠っています。墓石が雪の下に埋もれていて見つからないのかなと次々に墓の雪をのけていきましたが、やはり見つかりません。そこでもう一度管理人室に行き聞き直しましたところ、彼が教えてくれた区画が間違っていて、今度は容易に見つかりました(写真)。

朝河の業績を記念して、彼がイエールに来て 100 年経った2006年に、大学構内に朝河庭

園が造られました。意外に小さいのですが、日本から運んだ石が見事でした(写真)。

朝河の奥さんは Miriam Dingwall(1879－1913)といいます。朝河の墓石の下の方に、彼女のことが書いてあります(写真)。Miriam と朝河の結婚生活は長くは続きませんでした。Miriam はバセドウ病(?)に罹ったらしく、手術を受けたのですが、まだ 30 代の若さで亡くなってしまいました。二人に子供はなく、朝河はその後ずっと一人暮らしでした。

朝河と Miriam のお墓は、朝河の郷里の福島県二本松市にもあります。丘の上の広々とした墓で、Miriam のお墓には、美里安之墓と書いてあります(写真)。

朝河の母親は朝河が2歳のときに他界し、後妻として来たのが私の郷里、伊達郡梁川町の神官の娘でした。この継母のおかげで、朝河は丈夫な子に育ったそうです。スママセン、すぐに郷里の話になってしまいます。



1940年撮影



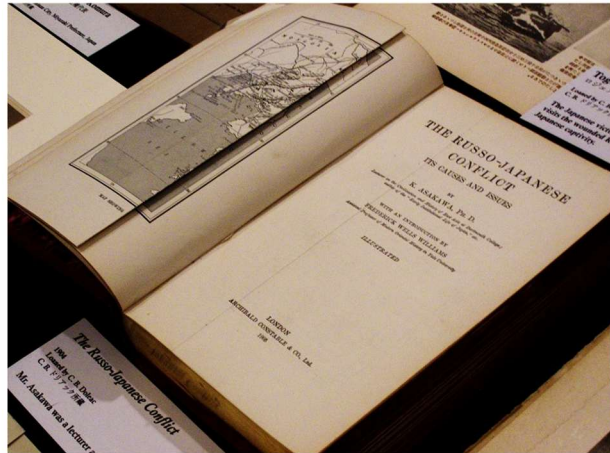
朝河貫一記念ガーデン



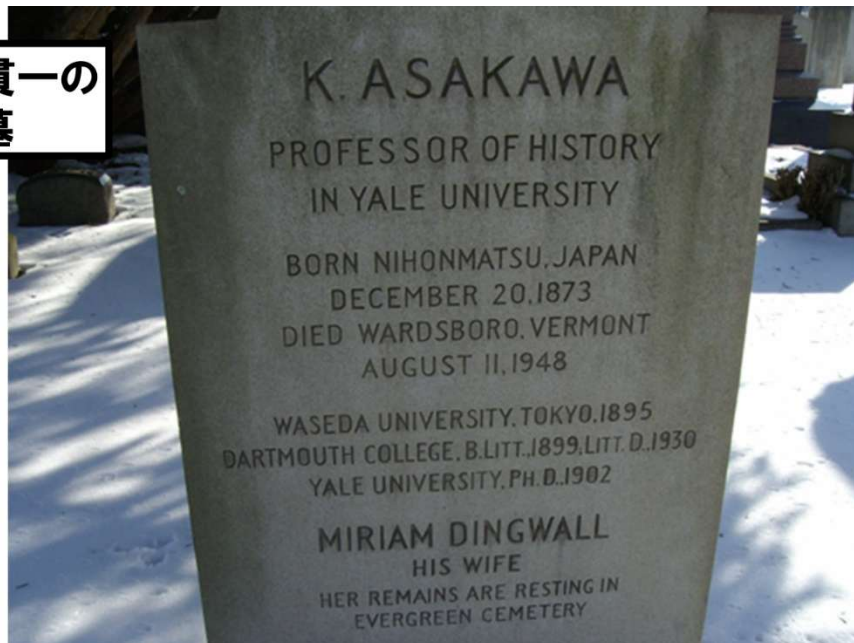


John Paul Jones House の2階に  
日露講和交渉資料室がある。

朝河が書いた著書  
**The Russo-Japanese Conflict.**  
Its causes and Issues.



朝河貫一の  
墓







**Miriam Dingwall**

朝河夫妻の墓  
二本松市、金色墓地内  
かないろ



● ポストン近郊の日本人の足跡、ジョン万次郎と岡倉天心と小澤征爾。

ジョン万次郎(1827—1898)は、おそらくアメリカ・カナダへ入国した最初の日本人でしょう。私が知る日本人のうち、万次郎は 1843 年にアメリカ、マサチューセッツ州ニューベッドフォードに入国してます。カナダのフレーザー川で鮭漁師として働き塩鮭輸出で財を成した永野萬蔵(1855—1924)がカナダに密入国したのは、1877 年です。パイオニア及甚こと及川甚三郎(1845—1927)がカナダへ密入国したのは、ずっと遅くて1890年ごろでしょう。もちろん記録に残ってないアメリカ・カナダへの入国者は多いはずです。

万次郎は土佐国幡多郡中ノ浜村の生まれで、14歳のときに漁船に乗り込み、足摺岬の沖合で突然の強風に船ごと流されて難破。鳥島に漂着し 143 日間を生き延びた後、船長ウィリアム・ホイットフィールド(William H. Whitfield、1804—1886)率いるアメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号に発見され救助。その後の万次郎の波乱万丈の生涯は、皆さんもご存じのことと思います。

万次郎が住んだ米国マサチューセッツ州フェアハブンでは、今も現存する万次郎ゆかりの地を、万次郎トレールでたどることができます。出発はミリセント図書館。万次郎に関する書物や日本刀などのコレクションが展示されているそうです。次は万次郎とホイットフィールド船長が通った旧ユニタリアン教会、万次郎が住んだホイットフィールド船長の旧宅などです。

聖路加国際病院の名誉院長でした日野原重明先生(1911—2017)は、2008年 97 歳のとき、ホイットフィールド船長宅を募金活動で集めた資金で買収・改修して町へ寄付。日米友好の家 Whitfield-Manjiro Friendship House と名付けて、万次郎がアメリカに上陸した日にオープンしました。

私が友人とホイットフィールド船長宅(写真)に行ったのは、日野原先生が動き出した頃のようにです。ドアには鍵がかかっていましたが、家の中はドアの横の窓から容易に覗くことが出来ました。船長と万次郎の写真が、部屋の壁にかけてありました(写真)。

次はボストン美術館の岡倉天心(1863—1913)(写真)です。ボストン美術館は地元の有志によって設立され、アメリカ独立100周年にあたる 1876 年に開館しました。エジプト美術、フランス印象派絵画などがとくに充実しています。仏画、絵巻物、浮世絵、刀剣など日本美術の優品も多数あります。日本美術品はモース、フェノロサ、ビゲロー、天心らが収集・寄贈しました。

ボストン美術館の裏側に岡倉天心の天心園があります(写真)。水を使わずに山水の趣を表した枯山水庭園です。ボストン美術館東洋部長だった天心が日本から持ってきた石燈籠や石塔を使って庭園を造ったことから、天心の名にちなんで天心園と命名されました。日本が恋しくなったら、ぜひお訪ねください。心が安らぎます。

岡倉天心は、日本人の思想家として、世界に日本の文化を発信した人です。茶室で一杯の茶を飲むことから多くのことを学べると主張し、「The Book of Tea」を書きました。アメリカでの講演をまとめた本です。見事な英語です。原文で読もうとしましたが、あまりにも難解で途中で挫折してしまいました。日本人が本来持つ慈悲の心や自然への畏敬の念などを伝えているそうです。

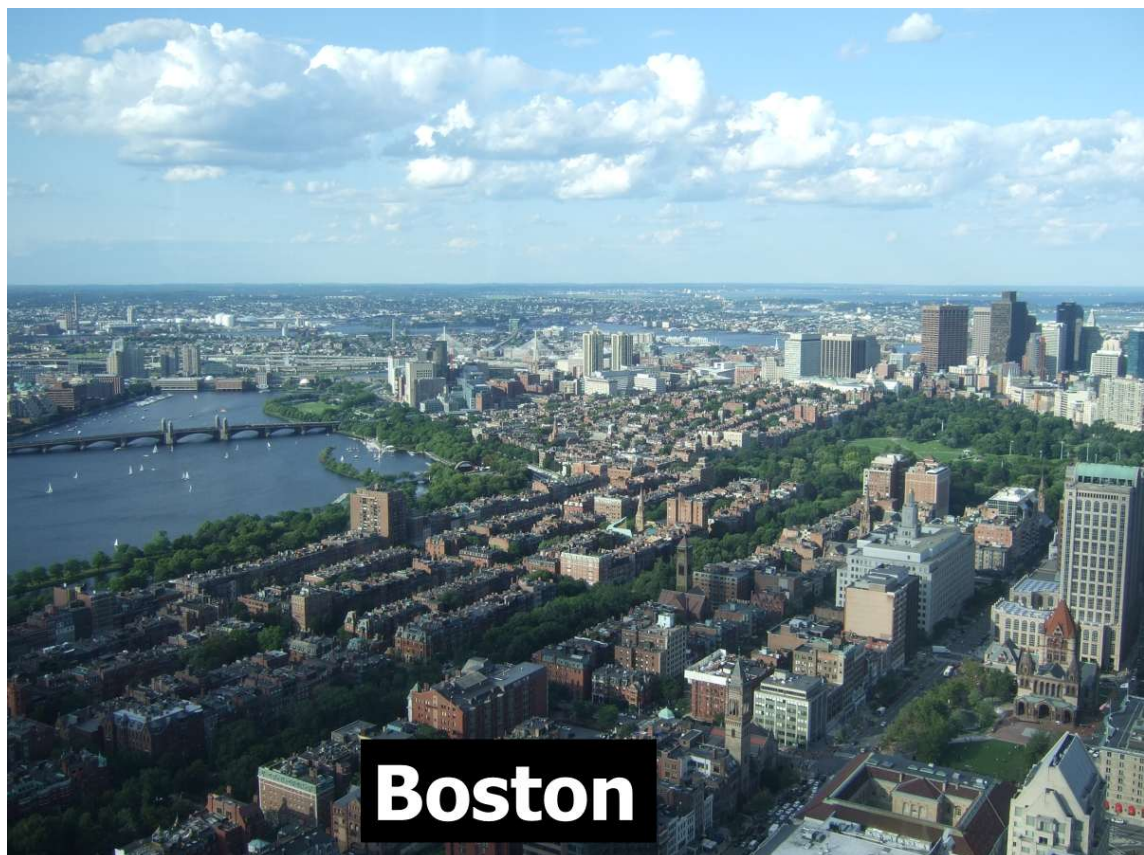
次はBSOです。BSOというだけでボストンの人には Boston Symphony Orchestra だと分かるらしいのですが、私は地元にながら全く聴きに行きませんでした。2008年には京都との姉妹都市提携の何周年目かの記念に、小澤征爾(1935—2024)が BSO を指揮しました。安い特別料金で聴けて、その後のパーティでは小澤さんと接することが出来たそうです。しかし前からの予定が入っていて、行きませんでした。音楽好きにはよだれが出そうな美味しい話でしょうが。小澤さんは BSO の音楽監督を 1973 年から 29 年間務めました。

夏の避暑地タングルウッド Tanglewood(写真)はボストンから西へ車で 2 時間、マサチューセッツ州の西の端にあります(地図をご覧ください)。ここが BSO の夏の演奏地です。小澤さんの Seiji Ozawa Hall (写真)があります。このホールの外の芝生で演奏を聴くのだそうです。でも私が行ったのは晩秋で、誰もいなくて、賑やかな舞台の面影はありませんでした。

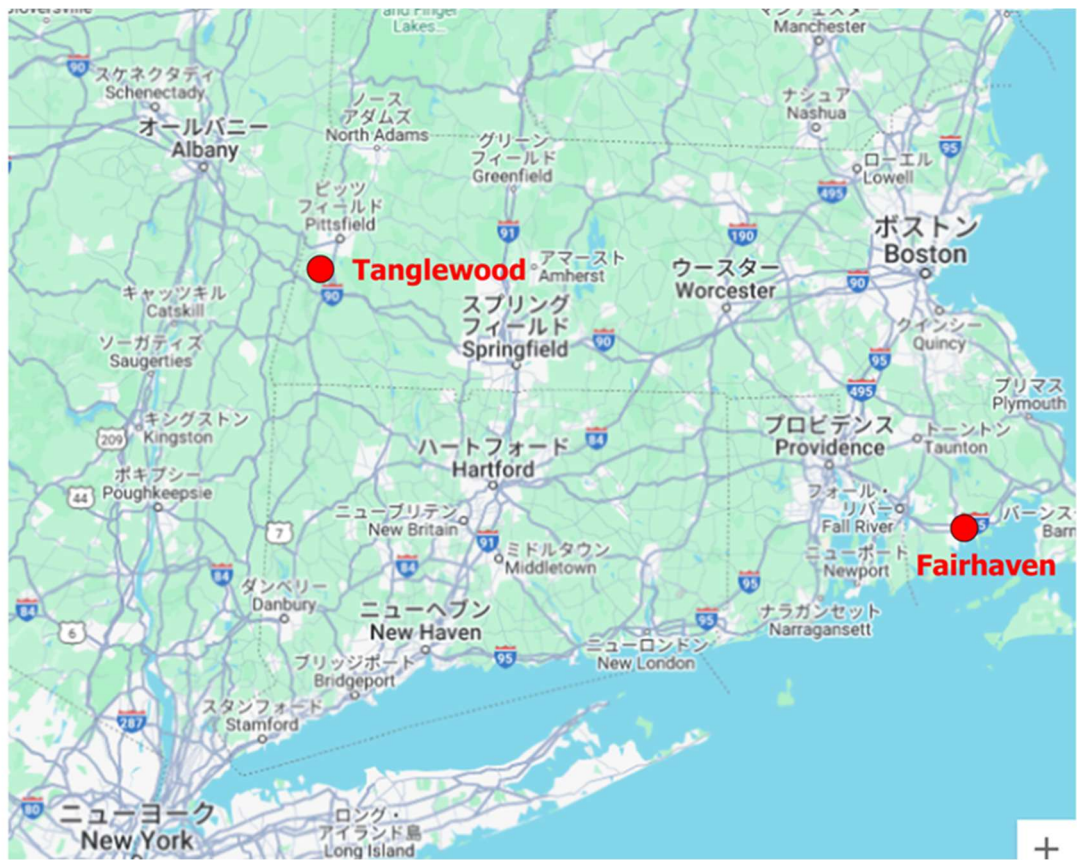
フェンウェイ・パーク Fenway Park はボストン・レッドソックスの本拠地です。人気が高く、

なかなか入場券が手に入りません。2008年頃は平成の怪物・松坂大輔投手が在籍していたときですが、故障者入りすることが多いこともあって、試合は見てません。お客さんを案内したのは試合がない日で、静かな球場でツアー客だけがウロウロしてました。左翼フェンスにそびえ立つ11.3メートルもある緑色の高い壁はグリーン・モンスターと呼ばれます。市内の限られた沼地に建てられたため、ホームベースから左翼までの距離が短く、ホームランを防ぐために左翼フェンスを高くしたのです。その代わり、ここに当たって跳ね返る2塁打が多くなりました。

日本人が元気になる巨大な地球儀 Mapparium がボストンのダウンタウンの Mary Baker Eddy Library にあります。1935年の世界地図を、ステンドグラスで出来た直径9メートルの巨大な地球儀の中から見上げるのです。当時日本が占領していた地域がそっくり日本の領土として紫色で示されてます。樺太の南半分、カムチャツカ半島のすぐ近くまでの千島列島、韓国と北朝鮮を合わせた朝鮮半島、それに台湾です。広大な満州国(1932-45年)は日本とも中国・ロシアとも異なる色で区別されてます。満州国は関東軍の主導の下に独立したわけで、大日本帝国とは区別してあります。Manchukuo と書いてます。こういう時代もあったんだ。これを見てましたら元気が出てきました。チト複雑な思いもありましたが。ただし撮影禁止のため、写真をお見せできないのが残念です。ニッポン人なら訪れて欲しい所です。







ワイトフィールド船長の家

万次郎トレールの案内板が  
ワイトフィールド船長の  
家の前にありました。





**ウィリアム・ホイットフィールド船長**



**ジョン万次郎**



**岡倉天心**

**ボストン美術館の  
天心園**





**Tanglewood**

**Seiji Ozawa Hall**



● 外務大臣・小村寿太郎、健康でもっと長生きしていたら・・・。

小村寿太郎(1855—1911)は日露戦争後のポーツマスでの日ロ和平交渉の日本代表です。外務大臣でした。この項目の最後にある日露講和会議(ポーツマス会議)の写真をご覧ください。この会議は、アメリカのセオドア・ルーズベルト大統領の仲介で、風光明媚で警備上安全なアメリカ、ニューハンプシャー州のポーツマス市の海軍の島で、1905年8月10日から9月5日まで行われました。

ボストン郊外に住み始めたときにドライブしてましてたら、たまたまポーツマスのビジターセンターに着きました。ここはひょっとしてポーツマス条約のポーツマスではないかと聞きまして、そうだと言われて、やったー！でした。

”There Are No Victors Here” という本があります(写真)。この本の表紙に、ロシア代表のウイッテが条約にサインするのを小村寿太郎が食い入るように見ているスケッチがあります。この場面は撮影が許されなかったため、ロシア側の随員が急いでスケッチして新聞社にリリースしたとのことです。小村のサインとウイッテのサインもありますが、なぜかウイッテのサインの方が上に載ってます。「ここに勝者はいない」というこの本のタイトルを具現しているようです。小村がサインした後に市に寄贈したペンの写真もあります。

この本のすぐ次のページには、表紙の右側の写真にあります新聞のトップニュース、平和！が訪れたという記事が載ってます。ポーツマス会議のホストのポーツマス市が日ソどちらが勝

ったかよりも戦いが終わって東アジアに平和が訪れたことを祝っているのです。その次のページには、ポーツマス市の前市長が日南市の小学校を訪れたときの写真や宮崎県日南市飫肥にある小村寿太郎記念館の写真が載ってます。その後のページは、日露戦争の解説やポーツマス条約についての解説などです。

なぜこの本では日本のことを最初に紹介しているのでしょうか。その理由について述べてます。1985年にこの本が最初に出版されましたが、それ以前にはポーツマス条約について知っている市民はほとんどいなくて、日本人の観光客が聞いてくるぐらいでしたが、小村の生まれ故郷の日南市の市長が日南市とポーツマス市の姉妹都市提携を提案したため、それがきっかけでポーツマスの前市長が日南市の学校を繰り返し訪れたり、日南市から多くの人がポーツマス市を訪れたりするようになったのだそうです。そしてその後もずっと平和会議や交換留学生などの行事を通して、友好関係が続いているとのこと。そのために、この本の最初に日南市や小村寿太郎など日本のことが書いてあるのだそうです。

さて小村寿太郎のことですが、ポーツマスの John Paul Jones House の2階の日露講和交渉資料室に入ってすぐ正面に小村が講和会議で座っていた椅子が置いてあります(写真)。この資料室には、小村寿太郎らの日本代表とウイッテらのロシア代表が共に宿泊していた風光明媚な Hotel Wentworth のバラ園を歩く小村寿太郎の写真があります。ある日の夕方、小村とウイッテは秘密裏にここで会って、フランス語で、お互いが極東の平和と経済、政治の安定を望んでいることを確認しました。交渉では表面上は譲らないが、二人の心は同じ方向を向いていました。

この資料室には様々な写真や絵が展示してあります。明治天皇がロシア皇帝と握手をしている想像画や、ルーズベルト大統領と日本代表・ロシア代表との記念写真などです。

小村寿太郎はイギリス・アメリカ・ロシア・清国・朝鮮(韓国)の公使・大使を勤め、2度の外相時代にはポーツマス条約の締結以外にも、日本にとって日露戦争に勝つために極めて重要となった日英同盟の締結、長年の課題だった欧米との不平等条約の解消を実現しました

小村には、アメリカ留学で鍛えた抜群の語学力があるそうです。外交官になってからも仕事の合間に大量の洋書を読みこなすなど、小村の外交政策の基盤として高度な語学力に支えられた情報収集力があつたことは疑いないようです。しかし結核に罹患し、脳や髄膜に結核菌が播種したらしく、56歳の若さで亡くなりました。彼が健康でもっと長生きしてたらすごい政治家になっていただろうなと思うと、残念でなりません。宮崎県日南市飫肥の小村寿太郎記念館で撮った小村寿太郎と押味が並んだ写真、記念館で見た小村のエピソードなどをご紹介します。



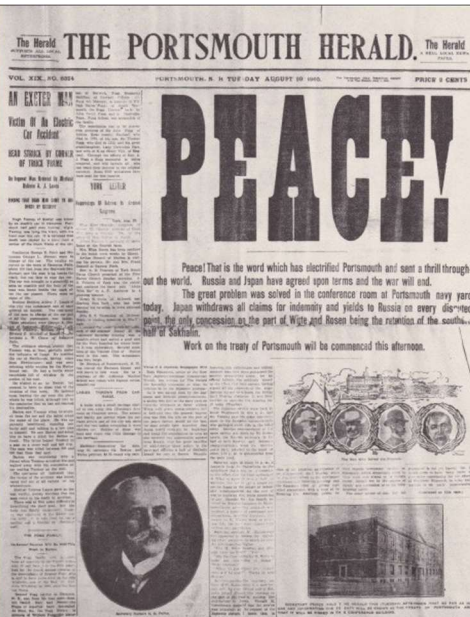
## 日露講和会議 (1905)



### There Are No Victors Here



A Local Perspective  
on the Treaty of Portsmouth  
by Peter E. Randall





小村寿太郎の椅子



小村寿太郎

#### WALK IN THE ROSE GARDEN - バラ園の散歩

Portsmouth treaty historian Thomas Wilson believes that evening Witte and Komura, both of whom spoke French, met secretly and alone in the rose garden at the Wentworth, and convinced each other of their desire for peace and economic and political security in the Far East. Despite the disagreements expressed between Witte and Komura during the formal sessions, it is believed that the commitment to peace expressed to each other during the rose garden walk ultimately kept the delegates negotiating long enough for their government to agree on peace.



*Komura walking at Wentworth.  
Harper's Weekly.*





**"We are good fighters, but we want peace"—Teddy.**  
 米国大統領セオドア・ルーズベルト (Teddy) の仲介で、  
 明治天皇とロシア皇帝ニコライ2世が握手（想像図）

米国大統領セオドア・ルーズベルトを中央に  
 日本代表とロシア代表が記念写真。  
 右から2人目が小村寿太郎。



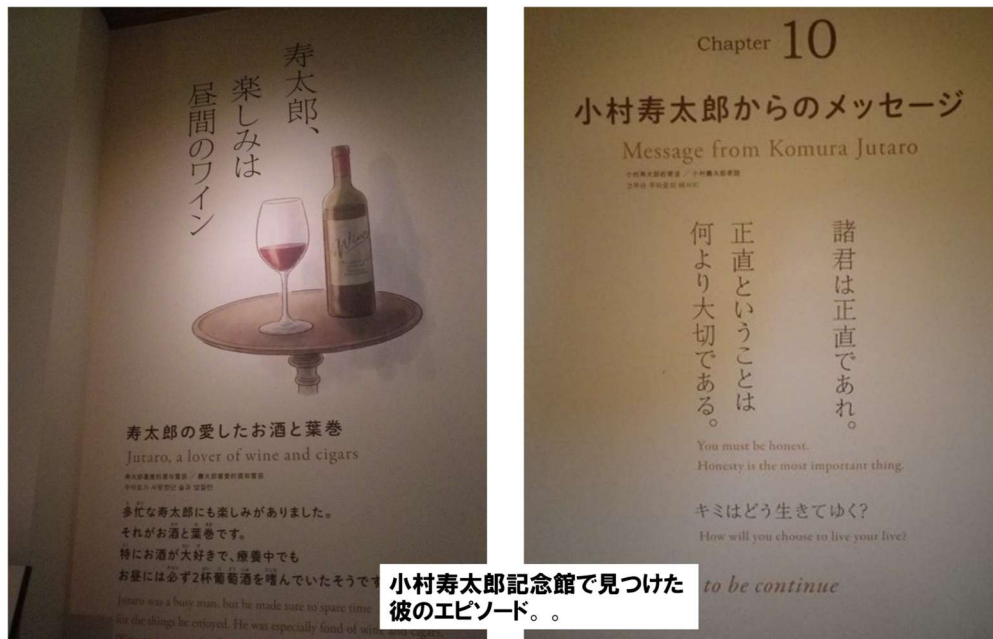
*President Theodore Roosevelt, center, with Witte and Rosen at left, Komura and Takahira at right. In Russia, the newspapers used only the six feet, seven inch Witte, Rosen and the President, while Japanese newspapers featured only Roosevelt with the five feet, four inch Komura and Takahira. Photograph by Underwood & Underwood News Service. Hearst's Weekly. D.H.C.*



**小村寿太郎記念館**







● カナダ西海岸のバンクーバー島やプリンスルパートで見つけた日本人の足跡。

バンクーバー島のカンバーランド Cumbiarland に最初の日本人 100 人が入植したのは 1891 年でした。他の入植者たち(イギリス系、中国系など)とともに石炭の採掘に従事し、最盛期にはおよそ 600 人の日系人がいたそうです。劣悪な労働環境の中、勤勉に働く彼らが鉱山、ひいてはこの村の発展に大いに寄与したのは紛れもない事実でしたが、第二次世界大戦中の強制移住により状況は一変。敵国人扱いを受けた 400 人から 500 人の日本人全員が、ブリティッシュコロンビア州の内陸部やアルバータ州、オンタリオ州へと強制移住させられ、散り散りになってしまいました。終戦から5年が経ちようやく強制移住が解かれても、カンバーランドに戻ってくる日系人はほとんどいませんでした。石炭産業も斜陽化し、ついに 1966 年には閉山となりました。残された日本人村や墓地は管理する人もなく放置され、日系人の歴史は文字どおり生い茂る草木の中に埋もれていきました。荒れ放題だった日系人墓地は戦後、村の有志により少しずつ修復・整備が進められました。2008 年、この墓地は村の歴史遺産に指定されました(写真)。また日系人墓地だけでなく、かつての日系人居住地跡(No.1 タウン)の整備も進められました(写真)。カンバーランドをドライブしたとき、この墓地や No.1 タウンのことは知りませんでしたので、通り過ぎてしまいました。

バンクーバー島北東のコーモラント島のアラートベイはトーテムポールで有名な観光地です(写真)。この村を歩いていたら、地元の人が日本人の墓があるといって案内してくれました。見ると、38歳で亡くなった香川県人、佐々木卯平さんのお墓です(写真)。しかし、周囲には日本人らしい墓は見当たりませんでした。この人は一体どんな運命をたどったのでしょうか。村人の話では、今でも日本人の子孫が数家族いるそうです。サケ漁が盛んな頃には、実に多くの日本人が住んでいたそうです。

プリンスルパート Prince Rupert はカナダ、ブリティッシュコロンビア州西部の港湾都市で、スキーナ川の河口にあり、対岸にあるクイーンシャーロット島(今はハイダグワイと改称)への観光拠点です。

黒潮は日本からいろんなものを運びます。もちろん人間も。生きて漂着した日本人も多かったとか。1987年、紀伊半島尾鷲市の一丸(かずまる)という船に乗った漁師が紀伊半島沖で行方不明になり、船だけは1年以上かかって、プリンスルパートの沖合いのクイーンシャーロット島へ漂着しました。漁師は行方不明のままです。たまたま尾鷲市とプリンスルパートは姉妹都市だったこともあって、船はこの町の海に見える公園に展示され(写真)、漁師の奥さんと呼んで供養したそうです。

プリンスルパートの南東にある North Pacific Cannery Village National Historic Site(写真)を訪ねました。Cannery とは缶詰工場の意味で、サケの缶詰を作る工場が保存してありました。ここはカナダ西海岸に現存する最古の缶詰工場村で、1889年に建てられ1958年まで操業していました。

19世紀後半から盛んになったサケ漁とサケの缶詰作りのために、西海岸には最盛期に200以上もの缶詰工場が作られました。缶詰工場といっても缶詰作りに従事する工員やその家族だけではなく、サケ漁をする漁師も家族と住んでましたし、サケをとる網を作ったり修理したりしてました(写真)。海岸沿いに建てられたのは、新鮮なうちにサケを加工するためと、漁業に従事する先住民の労働力を確保するためでした。最初はすべて手作業でしたが、20世紀に入り機械の進歩とともに、缶詰作りも機械化されました。先住民、日本人、中国人、白人が働いていましたが、日本人は主にサケ漁と網を作ったり修理したりする作業に、先住民はサケ漁と缶詰作り、中国人は缶詰作りと調理、白人はサケ漁と事務・管理職という具合に仕事を振り分けました。それぞれ得意な分野が違ったのです。先住民にとっては、網を修理するという器用さと根気がいる作業は全く苦手だったのです。

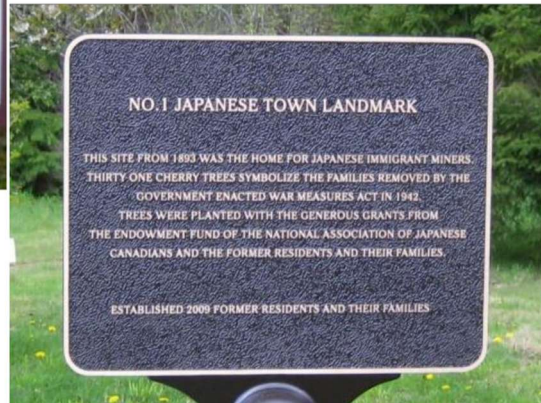
この缶詰工場の周囲に最盛期には家族とともに700人が住み、うち半数が漁師で、漁師の半分は日本人でした。日本人は漁の技術や網を作る、修理する技術は非常に優秀だったとガイドが言ってました。彼らは人種ごとに別々の区域に住んでました。売店には、日本から輸入されたお酒などがまだ陳列してありました(写真)。

何故1958年に工場は閉鎖されたのでしょうか。缶詰作りが衰退した主な理由は何だったのでしょうか。どこを見ても説明はなかったのですが、別の資料によりますと、缶詰産業の規模が拡大したためサケをとり過ぎサケの数が急に減ったためとのことでした。でもサケ釣りをしたらたくさん釣れましたので、付近の海は今はサケであふれているようです。



198柱が永眠する日系人墓地

残念ながらこの2か所とも  
知らずに通り過ぎてしまいました。



コーモラント島アラート・ベイは  
トーテムポールで有名

コーモラント島アラート・ベイにある日本人のお墓







カナダ西海岸の港町 Prince Rupert と  
その南にある North Pacific Cannery  
National Historic Site.

1987年、紀伊半島尾鷲市の丸(かずまる)という船に乗った漁師が紀伊半島沖で行方不明になり、船だけは1年以上かけて、Prince Rupert の沖合いにある Queen Charlotte Islands (今は Haida Gwaii と改称)へ漂着。漁師は行方不明のまま。たまたま尾鷲市と Prince Rupert は姉妹都市だったこともあって、船はこの町の海見える公園に展示。漁師の奥さんと呼んで供養。





サケの缶詰を作る機械

サケを捕る網を修理中



売店の棚には日本のお酒とクラッカーと味の素などが

日本人の子供と小学校と日本人の先生の写真



# ● アラスカの星野道夫と植村直己、そして野田知祐。

夏休みにフェアバンクスからジェット機で、さらに北のデッドホース、バローへ飛びました。バローは地球のてっぺん、アラスカ最北端にある北極海に面した村です。バローの北極海には、冰山というには高さが無い平らな氷が多数浮いてました。両足を海に浸けましたら、数秒で冷たいというよりも痛いと感じ、あわてて水から飛び出ました。その後に来た若い白人男女10数人は水着になって一斉に飛び込みました。すぐに戻ってきましたが、体はガタガタ震えてました。

バローには、北極海を見下ろす丘の上に、日本人親子の慰霊碑があります。プロのパイロット

だった娘が母親に北極海を見せたくて付近を飛びましたが、バロー沖に墜落。飛行機はしばらく浮いてたそうですが、海が荒れていて救助できなかったとか。残された家族が慰霊碑を建てました。

アラスカの日本人といえば、フランク安田(1868—1958)、星野道夫(1952—1996)、植村直己(1941—1984)が有名です。新田次郎の「アラスカ物語」の主人公、フランク安田は宮城県石巻に生まれ、バローに住み、やがて密漁と乱獲により鯨やアザラシが獲れず食糧難に陥ったバローの村人を連れて、妻のネビロと共にブルックス山脈を越えてユーコン川近くへ移動、ビーバーという村を作った日本人です。戦時中は一時日本人ということで拘束されましたが、没後の1989年に功績が認められ、アラスカ州から表彰されました。

ビーバー村には安田とネビロのお墓があります。家はまだ残っているはずですが。ビーバー村はフェアバンクスからさほど遠くはないのですが、道がありません。定期航空路線もなく、ツアー客が4人以上いるならフェアバンクスの航空会社が臨時便を出すというのです。しかし、4人は集まらず、行けませんでした。

日本人女性がビーバーの男性と結婚してビーバーに住み、日本人ツアー客のガイドをしていたことがあります。しかし彼女はユーコン川で夫とともに行方不明になりました。

星野道夫は高校在学中にアラスカの写真に魅了され、言葉も分らぬままアラスカに単身飛び込み、やがて写真家となりアラスカの自然を撮りました。悠久の時を旅するカリブーの群れ、生きることに懸命な動物たち、壮大な自然の移り変わり、極北に暮らす人々との交流などを綴る感動の作品を多数遺しました。アラスカのすべてを愛した星野の生命の記録です。それにしても、星野の文章は何故こんなに読む人に訴えるのでしょうか。星野は1996年、カムチャツカでヒグマに襲われて亡くなりました。43歳でした。

フェアバンクスにはまだ星野の家が残ってるはずですが。2009年夏、フェアバンクスで星野の家を探しました。探偵ごっこ悪い癖が出ました。ビジターセンターで、日本の有名な写真家でアラスカの写真を撮っていたホシノと聞いても、誰も知りません。そしたら案内人が電話帳を持ってきました。そこにホシノNとあります。電話番号も書いてあります。Nはきっと奥さんの直子さんに違いないと、電話番号から探し当てた住所へレンタカーで向かいました。市街地から離れた山の中です。ところがいくら探しても、その住所が見つからないのです。番地が飛んでしまうのです。そしたら妻が、コピーにもう一つ別の住所が印刷してあることに気づきました。そこはあまり遠くない場所です。今度はそちらへ行きましたら、簡単に見つけました。山の中腹を通る道から細い道に入り、そこを上り詰めると、写真で見覚えのある家がありました(写真)。ノックをしても返事がありません。最近住んでいた気配はあまりなく、屋根の板は剥がれ雨漏りが気になります。ベランダには野菜らしいものが植えてあり、これは最近まで手を入れた気配が感じられます。ドア横には3人の家族の名前がありました(写真)。星野が息子に描いたと思われる雪だるまの絵もありました。家の横には彼が愛用していた4輪駆動車がありましたが、プレートは94年のままです。今、残された二人はどこで何をしているのだろうか。息子のために家を残してあるのだろうか。でも息子はもっと自由な選択がしたい



かもしれないな。でもいずれ親のことを知りたくなるときが来るだろうな、などと話しながら去りました。

去年、北海道立帯広美術館で、2か月にわたって星野道夫の写真展が開かれました。「悠久の時を旅する」という題です。2021年から全国各地を巡回中の写真展でした。懐かしくて、2回通いました。奥さんの直子さんと写真家の方による対談や直子さんのトークショーもあったそうです。この写真展では、2020年に出版された同名の単行本の内容を展示してました。監修が星野直子さんです。

植村直己は冒険家で、1970年世界最高峰エベレストに日本人で初めて登頂し、同年世界初の五大大陸最高峰登頂者となり、1978年に犬ぞり単独行としては世界で初めて北極点に到達しました。1984年冬期のマッキンリー山(今はデナリ山に改称)に世界で初めて単独登頂しましたが、下山途中で消息を絶ちました。

「青春を山に賭けて」は彼が最初に書いた本です。無一文で日本を脱出し、五大大陸最高峰に初登頂し、アマゾン川の筏下りに成功するまでの青春記です。無銭旅行など思い切った無鉄砲なことを平気でやる性格と行動力に強く引かれ、その後の彼の行動から目が離せなくなりました。犬ぞり行に先立つ5か月間、単身、グリーンランドのエスキモーと共同生活し、衣食住や狩り・釣り・犬ぞりの技術などを極地に暮らす人々から直に学びました。冬山単独行ではモンブランでクレバスに落ちた際にアイゼンと荷物が引っかかり九死に一生を得た経験から、何本もの竹竿をストッパーとして身体にくくり付けて冬のマッキンレー山に登攀しました。

アンカレッジとデナリ国立公園の入り口との間の幹線道路3号線にデナリ山が見える公園があり、登山の歴史が書いてあります。そこに、「1970年植村直己はマッキンレー山に最初の単独登頂に成功、1984年には最初の冬季単独登頂に成功するも下山途中で死す」とありました。あれほど偉大な冒険家の業績が、たったの4行でした。

デナリの登山に興味のある方は、タルキートナの博物館も訪ねてください(写真)。植村直己に関する日本語の記録もあります。デナリ登頂の先陣争いは激烈で、偽の登頂報告もあって、その真偽のほどを検証する話もあり、興味が尽きません。

最後にもう一人、どうしても触れておきたい人がいます。野田知祐(1938—2022)です。野田さんは私の大好きな作家で、カヌーイストです。私がカヌーに興味を持つようになったのは、野田さんの本を読み始めてからです。野田さんのカヌーはいわゆる競技用カヌーではなくて、のんびり川を下るというカヌーです。アラスカのユーコン川を下り、途中のインディアン部落に寄っては彼らとの出会いを書いてます。以前、徳島に講演に招かれたついでに、日和佐町のそのまた奥の彼が住んでいる田舎まで訪ねて行き、サインをもらってきました。別れるときに握手をして、この手でアラスカを漕いだのですねと言いました。彼がサインしてくれた本は、もちろん大事にとってあります。なぜ彼の本が好きかといいますと、彼の性格と個性です。彼の心に生き続ける自然への憧憬、いつまでも持っている少年のような遊び心、自然を破壊する者に対する強い憤りです。

2009年に車でアンカレッジからフェアバンクスに行く途中、ユーコン川を渡りました。

Yukon River Bridge の上からユーコン川の上流を見て、野田さんはこの川を下ったのかと思いにつけりました(写真)。川は濁っていて、温かったです。星野さん宅を訪ねた後ですが、フェアバンクスからジェット機で北極海のデッドホースへ向かう途中、幾筋にも分かれて蛇行しているユーコン川が見え(写真)、また野田さんを思い出しました。



星野道夫

星野道夫が住んでいた家



星野の家のドア横にある家族3人の名前。。  
星野が息子に描いてあげたと思われる  
雪だるまの絵も。

ドア横の3人の名前









野田知祐



上空から  
ユーコン川を  
見る



アラスカの Yukon River Bridge  
からユーコン川上流を見る

#### ● おわりに

海外への日本人留学生数は、2004年をピークに減っているようです。ただしコロナや円安などで流動的ですが。最近ではワーキング・ホリデーを利用して積極的に海外に出る人がいるようですが、どうもそれまでの印象では、若い人たちは言葉が不自由な外国に行ってわざわざ苦勞するのはばかげていると思っていたのではないのでしょうか。以下は野田さんの口癖です。若者は冒険がばかげていると思えば、国は滅びる。若いときは二度とない。失敗を恐れず海外に出なさい。

優秀で勤勉で責任感が強い日本人は、武士道精神を胸に、AI を駆使して、世界の人々の幸福・平和のために貢献して欲しいです。

最後はデナリ山を背景に、クラーク博士を真似て、次の言葉で締めくくります(写真)。

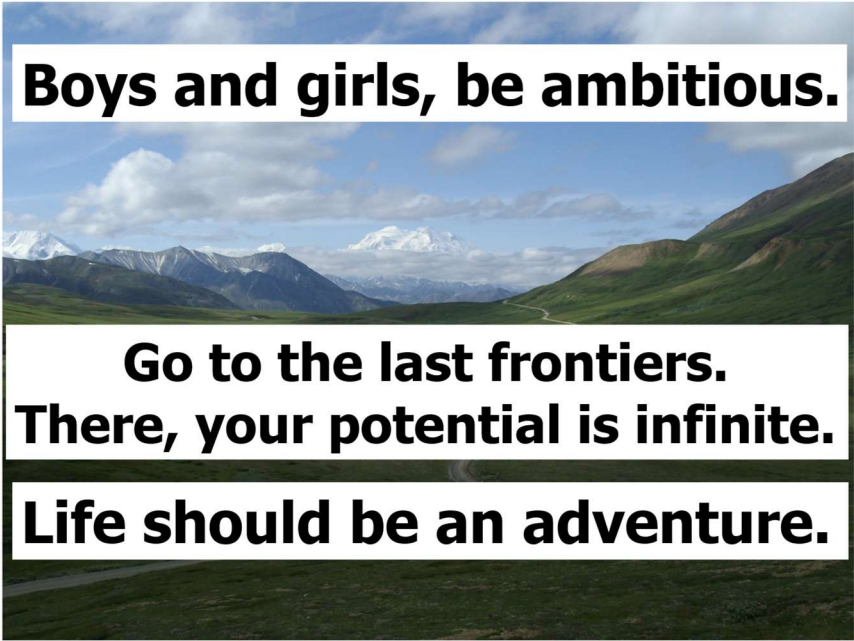
Boys and girls, be ambitious.

Go to the last frontiers.

There, your potential is infinite.

Life should be an adventure.

この last frontiers を Last Frontier に置き換えますと、アラスカ州の愛称になります。アラスカはアメリカ50州のなかの最後の州で、州内全域にわたって手つかずの自然が残っています。無限の可能性がある Last Frontier に行きましょう。最後は大好きなアラスカの宣伝になってしまいました。



**Boys and girls, be ambitious.**

**Go to the last frontiers.  
There, your potential is infinite.**

**Life should be an adventure.**